

多賀大社参詣曼荼羅(部分)(多賀大社蔵)



第17回企画展

◆ 能・狂言のふるさと近江 ◆

—古面が伝える中世の民衆文化—

平成9年9月13日(土)~10月19日(日)

能・狂言は、中世の人々が生んだ代表的な文化の一つです。最初は、神が老翁の姿で現れ、人々に祝福を与えるという、素朴な芸能でしたが、神社の祭礼、寺院の法会、勧進興行などの場で演じられる中で洗練され、民衆はもちろん、武家や貴族にも親しまれる芸能として成長してゆきました。いわば、能・狂言は当時最も人気のあった「現代劇」だったのです。当時、能・狂言は「猿楽」と呼ばれ、各地に猿楽座があつて、社寺を舞台に活躍していました。

近江国でも、南北朝時代から室町時代にかけて、延暦寺・日吉社に奉仕する近江猿楽上三座(日吉座、大津市坂本、山階座、長浜市、下坂座、長浜市)と、多賀社付近を根拠地とする下三座(敏満寺座、多賀町、大森座、八日市市、酒人座、水口町)の存在が知られています。その活動は、近江ばかりでなく、京都にも進出し、現在の能楽諸流の祖である大和猿楽四座(外山座、室生座、結崎座、観世座、坂戸座、金剛座、円満井座、金春座)などと競いあつて、人気を博していました。

今日の能・狂言の創造の一翼を、近江の人々も大きく担っていたのです。

本展は、この「近江猿楽」にはじまる能・狂言と近江のかかわりを、滋賀県下に残る関係資料を中心にたどることにより、近江文化の豊かさとその創造した人々の歴史を明らかにしてゆこうとするものです。

展示作品は、室町時代から江戸初期の能・狂言等の古面八七件を中心とした約一〇〇件。古面のなかに、中世の人々が育み、楽しんだ芸能の面影をのしただければと、考えています。

企画展の内容

☆ 展示会は、次のコーナーで構成しています。

(一) 近江猿楽の諸座

近江猿楽の上三座（日吉座・山階座・下坂座）と下三座（敏満寺座・大森座・酒人座）の芸能活動を、古文書や古面等で紹介します。

(二) 村々の神事と能・狂言

近江猿楽諸座とのかかわりは不明ですが、能・狂言が鎮守社の神事のなかで民衆に息づいていたことをうかがわせる、県下の古面を紹介します。

また、能・狂言以外の民俗芸能に使用され、当時の人々に親しまれていた古面も紹介します。

(三) 近江の面打ち「井関氏」

近江は、能・狂言のすぐれた面作者を輩出したことでも知られています。ここでは、室町時代末から江戸初期に活躍した「近江井関」歴代の作品を集めて、その活動を紹介します。

(四) 近江を舞台とした能・狂言

能・狂言には、近江を舞台としたものが多くあります。その作品を、絵画資料や舞台写真、また舞台となった地の現況写真等で紹介します。

☆ 主な展示作品

多賀大社参詣曼荼羅

紙本着色 一幅
縦一五・〇センチ×横一七・七センチ

多賀町・多賀大社蔵
多賀大社に伝来した三幅の内の一。参詣曼荼羅は

参詣をうながすことを目的として作られた境内絵図。多賀大社では、坊人と呼ばれる僧が、全国を勧進する際に携帯し、絵解きをして歩いたという。その図内には、本殿前の舞車の上で翁の能を演じる様子が描かれている。江戸時代初期の作品だが、構図は桃山時代の他の一本とほぼ同じであり、中世末の同社の神事能のありさまをうかがわせるものである。（表紙写真）

伊福貴山弥高・太平両寺和与状

紙本墨書 一通
縦三一・五センチ×横九五・〇センチ

山東町・観音寺蔵
近江における猿楽の初見史料。鎌倉時代末期の徳治三年（一三〇八）四月、伊吹山麓の弥高・太平両寺が伊福貴（伊夫岐）社一切経会所の所役等をめぐる相論に際し、とり交わした和与状。両寺とともに観音寺・長尾寺が連署している。その第七条に「馬場棧敷猿楽次第事、先規に任せ其の沙汰有るべき」とあり、伊福貴社の一切経会には、馬場において猿楽が催され、四カ寺の僧



伊福貴山弥高・太平両寺和与状（観音寺蔵）

が所定の棧敷で見学するのが恒例であったことが知られる。（県指定文化財『大原観音寺文書』の内）



能装束 紅地扇面散文様唐織（長浜八幡宮蔵）

能装束 紅地扇面散文様唐織

身丈一四七・九センチ×身巾六七・五センチ 一領
長浜市・長浜八幡宮蔵

唐織は、女役の表着に用いられる小袖形式の装束。紅地に扇面と梅・牡丹などを散らし文様として織り込んだ、華麗な織物である。江戸時代初期の製作と考えられており、江戸時代、四月三日の例祭に奉納された神能に用いられたものであろう。長浜八幡宮は、永享七年（一四三五）から同十一年にかけての堂塔修理の際、「近江猿楽三座」の山階座などを招いて勧進猿楽を催すなどしており、中世近江の猿楽座が活動の場とした神社の一つであった。（県指定文化財）

能面 癒見

面長二一・二サシ×面幅一六・五サシ

一面

愛知川上流の水源寺町政所の若宮八幡神社には、室町時代にさかのぼる古能面が多数伝来している。本面もその一つ。眉や口の周辺には墨で毛描を施しているが、彩色はほとんどなく、木地のままで髻跡もないほどに滑らかに磨かれている。ちなみに、政所から愛知川をさらに遡った蛭谷・君ヶ畑は木地師発祥の地として知られており、これらのことから、本面を含む同社の能面は、木地師の手によるものではないかと考えられている。世阿弥の口述した『申楽談義』によれば、室町時代初期、近江には「愛智打ち」という面の上手がおり、それは愛智庄を管理する延暦寺の末寺・坐禅院出入りの者であったという。この「愛智打ち」につながる面工の人々が、当社をはじめ愛知川流域の諸社の古面を残したのではなからうか。(町指定文化財)



能面 癒見

能面 小尉

面長二一・三サシ×面幅一四・〇サシ

一面

土佐国の総鎮守、土佐神社には五一面の能面が伝来、長曾我部元親らの寄進と伝えられる。その一面で、彩色が剥落した額の部分に墨書の跡があり、赤外線写真から「江州坂田北郡/住人井関□/源親信□/□時享禄元□/八月十六日」と判読できることから、加賀白山・平泉寺の僧三光坊の弟子の「面打ち」で、近江井関家の初代、上総介親信の作と知れる。井関家は、江戸時代初期に名人・河内家重(井関家四代)を出したことで著名だが、その初代の確実な作品は無く、その在銘の作例として貴重である。(市指定文化財)

福大夫面

面長一九・六サシ×面幅一四・七サシ

一面

近江には、能楽以外の祭礼行事に用いられた、中世の古面も多く残されている。本面は、その代表的なものの一つ。能の若い男面の表情に似るが、面裏に「田作福大夫神之面」と墨書があり、かつては、正月初申の稲講会という同社の豊作祈願の神事に用いられ、農耕の所作したものであったという。なお、面裏墨書によれば、本面は、永正五年(一五〇八)、桜宮聖出雲の作であり、作者出雲の属した桜宮は伊勢の朝熊神社のことと推定されている。(県指定文化財)

会期中の休館日

9月16日・22日・24日・29日、10月6日・11日・13日



能面 小尉



福大夫面

☆関連行事など

九月二十七日(出)

於：伝統芸能会館

「能オンステージ」

「巴」をめぐる能探訪(PART1)「面装束」

ホスト：河村晴道氏(観世流能楽師)
詳細は、市伝統芸能会館(電話二七―五二三六)

※講座・講演会は、歴博インフォメーション参照

学芸員のノートから⑦

石山寺所蔵の考古資料(瓦)について

石山寺は、近江八景「石山秋月」で有名な、瀬田川河口近くの伽藍山の山裾に建つ東寺真言宗の寺院で、西国三十三カ所観音巡礼第十三番札所として多くの人たちが参詣している。だが、本寺の創建についてはよく分かっていない。

石山寺の創建時期に関してよく取り上げられるのが、天平宝字三年(七五九)末に造営担当の役人が任命され、工事が始まった「保良宮」の造営である。この工事が始まると、石山寺が宮の鎮護の寺院として位置づけられ、その増改築が命じられたといわれている。工事は造東大寺司の担当で「造石山寺所」が設置されて進められることになり、天平宝字五年末から大規模な改修工事が開始される。この工事には最初から東大寺の大僧都良弁が深く関わっていたらしく、翌六年三月には自ら石山に赴いて実際に工事を指揮するといったように、かなりの力の入れようである。このように工事は国の威信を示すかのように急ピッチで行われ、翌年七月に早くも完成し、保良宮鎮護の寺院にふさわしい二十数字の堂舎を有する立派な寺院に生まれ変わる。

この石山寺増改築の状況を記した文献『正倉院文書』を見ると、新たに建立したものの、他所から移築したものにも混ざって、当地に由来からあった既存の建物を再利用したという内容の記述が登場する。それによると、増改築以前に、少なくとも仏堂一宇、板葺板倉一宇、板屋九宇の建物があったことになり、当地に石山寺の

前身となる寺院の存在が考えられる。では、いったい、この前身寺院と見られる建物群はいつ頃建てられ、どのような性格をもったものだったのだろうか。この疑問を解くカギが石山寺に所蔵されている瓦類のなかにある。

今回、幸いにも、石山寺の御好意により、この資料をお預かりして、調査できる機会を得たので、それらもつ意味を紹介してみた。

(一) 一つの考え方

○文献史料から

石山寺の創建を伝える資料はいくつかあり、いずれも聖武天皇や良弁に関わる伝承を載せている。その一つ『石山寺縁起』巻一を見ると、聖武天皇の東大寺建立に關わって、勅を受けた良弁が吉野山で祈禱した際に、夢の中に藏王権現が現れ、「近江国志賀郡の琵琶湖の南岸に一つの山がある。この山は靈地で、そこに行つて祈請しなさい。」というお告げがあったので、云々という件があり、これによりその地(石山寺)に草庵を建て、秘法を行つたとある。

この一連の記述のなかに、古老の伝えとして、当地は天智天皇の頃より靈地であったという内容があり、石山の地が天智天皇の頃より靈地として認識されていたことがうかがえる。

○石山寺所蔵瓦

石山寺境内地の発掘調査は昭和五十四年と平成二年に行われた二例(いずれも本堂南側の谷筋)のみで、伽藍中心部の発掘調査はまったくない。ただ、石山寺には、寛政十年(一七九八)八月に境内から出土したと伝える軒丸瓦が、『古瓦譜』と題された拓影集とともに所蔵されている。この瓦は、石山寺出土として、寛

政十歳秋八月穿堀廢址 之以下數品同之」とあり、境内のどの場所から出土したのかわかっていないが、南滋賀町廢寺出土の軒丸瓦と同型式のもので、大津宮前後の白鳳時代に遡る資料として近年注目されるようになってきた。

軒丸瓦はいずれも単弁蓮華紋系に属し、薄手の作りで、三種類に分類される。①は、単弁八葉蓮華紋で、小型の中房(蓮子一十四)、先端がやや角張り中央に稜を有し基部に子葉を持つ蓮弁、ツルハシ状の間弁、幅が狭く低い外縁からなる。②は、蓮弁の幅が広くなり、軍配形を呈する。弁数も六葉となり、子葉もなくなる。③は、蓮弁や中房などを凸線で表現した特殊な例で、弁数は六葉。以上の三例と同型式のものは、現在のところ南滋賀町廢寺にだけ確認されており、同廢寺でも出土量が少なく、生産地が特定できないなど、謎の多い瓦だといえる(なお、石山寺には現在、No.①が一点、No.③が一点保存されている)。

なお、これとは別に、平成二年度の発掘調査においても、平安時代の整地層中ではあったが、格子目叩きをもつ平瓦片が数点見つかり、前述の瓦類とともに、石山寺の創建時期を考える際の、重要な手掛かりとなっている。

(二) 石山寺の創建時期

石山寺創建については、平安時代以降の文献類から、聖武天皇の時代まで遡る可能性は指摘されていたが、近年の発掘調査成果と石山寺に伝わる境内から出土した古瓦により、さらに遡る可能性がでてきたといえる。

なかでも、境内から出土したと伝える古瓦類は、大津宮と関わりが深いといわれる南滋賀町廢寺で確認されており、時期も白鳳時代と見られることから、石山

寺の前身寺院が大津宮前後の時期まで遡る可能性はかなり強く、平成二年度の発掘調査で出土した格子目叩きを持つ平瓦片が、その可能性をより強くしたといえる。さらに、南滋賀町廃寺が大津宮と非常に関わりの深い寺院といわれることから、石山寺前身寺院も大津宮との関わりで考えてもよいのではないだろうか。

石山寺が建つ地は、東山道の要衝地である瀬田橋を眼下に見る地点にあたり、大津宮の東の入口として重要な場所を占めている。その地に大津宮に関する施設が存在することは十分に予想され、石山寺前身寺院をその施設にあてて考えることは可能だろうと思える。

(三) 大津宮と石山寺

大津宮跡は昭和四十九年末に錦織地区ではじめて大規模な建物跡が発見されて以来、現在までに十数地点から遺構が見つかっており、錦織以外の地区から同じような遺構の検出報告がないことから、大津宮跡は錦織地区にほぼ確定している。これとともに、大津宮を取り囲むように、同時期の四寺院(穴太廃寺、崇福寺跡、南滋賀町廃寺、園城寺前身寺院)が配置されていることも近年注目されている。いずれの寺院も交通の要衝地に立地していることから、大津宮を防御する性格を兼ね備えた寺院との見方が強い。

先に見たように、石山寺を大津宮との関わりでとらえた場合、その立地から、穴太廃寺をはじめとする四寺院と同じように、大津宮を防御する性格をもつ施設として考えられるのではないだろうか。

今回、石山寺から調査のためにお預かりした瓦資料は、数量的には少ないが、同寺の創建を考える貴重な資料であり、今後は、同型の瓦を出土する南滋賀町廃寺との関連性を中心に調査を進めていきたい。(松浦俊和)

大津市制一〇〇周年記念事業

『図説大津市史』

の編さんがスタート

このたび大津市では、市制一〇〇周年記念事業の一環として『図説大津市史』を編さんすることになり、その事務局ともいえるべき「大津市史編さん室」が大津市歴史博物館内に設置されました。

本市では、すでに市制八〇周年事業として『新修大津市史』全一〇巻を刊行していますが(昭和五三年〜六二年)、刊行後、粟津湖底遺跡や瀬田橋遺構など、発掘調査による新たな発見が続出し、また絵図や写真資料を初めとする歴史資料などの成果も、

その後の資料調査によって蓄積されています。今回の『図説大津市史』では、それら最新の成果によって、しかも写真や図版に重点を置いた、目で見えしめる、分かりやすい市史を目指し、現在準備を進めています。刊行予定は、平成一一年一〇月一日の市制記念日。

記述内容は、原始・古代から平成一〇年の市制一〇〇周年までを対象とし、構成は、上下二巻、各二五〇頁を予定しています(上巻「原始・古代」近世、下巻「近代・現代」。特に下巻では、大津事件や琵琶湖疏水など日本全体の歴史に重要な意味を

持った事柄や、明治三一年の市制施行以後の一〇〇年間の歩みなど、近現代の記述に重点を置きます。

なお、現在、市史編さん室では、市史発刊に向けて資料調査を実施しています。明治以降の建物(銀行・学校・役場・旅館・映画館・民家など)や風俗、町並みや風景などを写した写真、市内の商店や映画館のポスター・パンフレット、江戸時代から現代までの地図資料、江若鉄道や京阪電車、国鉄(現JR)、タクシーなどの交通関係資料、そのほか大津市の歩みを示す資料であれば、特に限定はありません。大津市の景観も、近年急激に変化しています。昭和三〇年代や四〇年代であっても、もう今から三、四〇年以前の、古い昔のことになってしまいました。その時代の資料でも結構です。これは新しい資料だから役に立たないだろうなどということはありません。大津市の変遷を示す資料が、今、必要なのです。

そのような資料にお心当たりのある方は、是非とも市史編さん室までご連絡ください。



丸屋町商店街の風景(昭和26年頃)

*連絡先

歴史博物館内市史編さん室

〒520 大津市御陵町2番2号

☎〇七七五―二一―六一七三(直通)

れきはくインフォメーション

10月		9月		8月	
25	土 ○雲住寺―橋守神社―不動道の道標―建部大社―近江国行轡―浄光寺 中の島公園(集合) 津田南小学校前バス停(解散) 13時~17時頃	20	土 ○古文書や古面から、中世近江に開花した能・狂言の文化を紹介します。 13時30分~15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	30	土 ○明治から昭和(戦後)までの懐かしい写真によって大津市内の親類の姿 邊をあつづけます。また、参加者の方々からも写真についてお話を伺う 時間を設けます。 13時30分~15時 講師 橋川 修(本館学芸員)
18	土 ○雄琴神社―福徳寺―雄琴城主和田秀純の翠一流れ堂(普門寺)―那波加 神社―法光寺―安養院 JR雄琴駅(集合) 安養院(現地解散) 13時~17時頃	13	土 ○立版古とは、江戸時代から明治・大正頃に流行した言わば紙模型です。 近世のジオラマをあなたも作ってみませんか。 10時30分~12時 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	23	土 ○近江の白鳳から奈良時代の寺院について、特に大津を中心に、考古学・ 歴史学の立場からその概略を紹介します。 13時30分~15時 講師 松浦 俊和(本館学芸員)
12	日 ○能・狂言以外の民俗行事に使われてきた古面について紹介します。 13時30分~15時 講師 和田 光生(本館学芸員)	4	土 ○近江出身の面作者・井関氏歴代の活動や作品を紹介します。 13時30分~15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	23	土 ○近江の白鳳から奈良時代の寺院について、特に大津を中心に、考古学・ 歴史学の立場からその概略を紹介します。 13時30分~15時 講師 松浦 俊和(本館学芸員)
5	日 ○能・狂言の発生と展開を、中世文化史主体の流れの中で考察します。 13時30分~15時 講師 齋藤 望(彦根城博物館学芸員)	20	土 ○古文書や古面から、中世近江に開花した能・狂言の文化を紹介します。 13時30分~15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	30	土 ○明治から昭和(戦後)までの懐かしい写真によって大津市内の親類の姿 邊をあつづけます。また、参加者の方々からも写真についてお話を伺う 時間を設けます。 13時30分~15時 講師 橋川 修(本館学芸員)
18	土 ○雄琴神社―福徳寺―雄琴城主和田秀純の翠一流れ堂(普門寺)―那波加 神社―法光寺―安養院 JR雄琴駅(集合) 安養院(現地解散) 13時~17時頃	13	土 ○立版古とは、江戸時代から明治・大正頃に流行した言わば紙模型です。 近世のジオラマをあなたも作ってみませんか。 10時30分~12時 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	23	土 ○近江の白鳳から奈良時代の寺院について、特に大津を中心に、考古学・ 歴史学の立場からその概略を紹介します。 13時30分~15時 講師 松浦 俊和(本館学芸員)
12	日 ○能・狂言以外の民俗行事に使われてきた古面について紹介します。 13時30分~15時 講師 和田 光生(本館学芸員)	4	土 ○近江出身の面作者・井関氏歴代の活動や作品を紹介します。 13時30分~15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	23	土 ○近江の白鳳から奈良時代の寺院について、特に大津を中心に、考古学・ 歴史学の立場からその概略を紹介します。 13時30分~15時 講師 松浦 俊和(本館学芸員)
5	日 ○能・狂言の発生と展開を、中世文化史主体の流れの中で考察します。 13時30分~15時 講師 齋藤 望(彦根城博物館学芸員)	20	土 ○古文書や古面から、中世近江に開花した能・狂言の文化を紹介します。 13時30分~15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	30	土 ○明治から昭和(戦後)までの懐かしい写真によって大津市内の親類の姿 邊をあつづけます。また、参加者の方々からも写真についてお話を伺う 時間を設けます。 13時30分~15時 講師 橋川 修(本館学芸員)

〈第17回企画展〉
能・狂言のふるさと近江
9月13日(出)~10月19日(日)

収蔵品紹介 28

松村景文七回忌追善寄合十二ヵ月図 一幅
絹本着色 一・二八・七×五六・八 個人蔵

江戸時代の絵師の世界は、流派組織という縦社会が厳然と存在する一方で、流派を越えた絵師同士の交流も活発に行われ、特に江戸中・後期以降は画壇とも呼べる同好(同業)の士の横のつながりが形成されていきました。

本作は掛幅の二画面に幕末京都の著名画家12人(近江のゆかりの画家3名を含む)が合作したものです。参加している画家のメンバー構成や描いている位置をみると、松村景文(一七七九~一八四三)の高弟が中心部にかたり、その周辺を当時の画壇の重鎮が囲んでいることがわかります。一見ただの合作に見えますが、実は画人同士の交流の証とも思われます。本作の箱書(共箱)には「嘉永二年(一八四九年)の年記があるのですが、この年はまさに景文の七回忌にあたります。各流派を代表する重鎮たちのいずれもが、合作では格の高いポジションとされる中心部に描かず、あえて景文の弟子たちを囲んで脇にまわっているのは、この寄合図が景文の七回忌の追善供養として描かれたためではないでしょうか。絵師景文の在世時の活躍が忍ばれる作品です。ちなみに、参加している絵師は画面の上から順に次のとおりです。

- 1 土佐光孚 禁裏御用絵師・2岸 岱 京都画壇の長老(岸派宗家)
- 3 狩野永岳 彦根藩お抱え絵師(京狩野九代)・4 竹村文珉 景文門人
- 5 八木奇峰 景文高弟(びわ町出身)・6 森 義章 景文高弟
- 7 秋 翠 景文門人・8 富田光影 景文高弟・9 横山清暉 景文高弟
- 10 磯野華堂 景文高弟
- 11 中島来章 円山派重
- 12 岸 連山 鎮絵師(元大津住人)
- 岸駒高弟 (のち岸派三代)



(横谷賢一郎)

※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。